

元暁の発菩提心正因説について

韓 普 光

1. はじめに
2. 『無量寿経宗要』の発菩提心往生正因説
3. 『阿弥陀経疏』の発菩提心往生正因説
4. 終わりに

1. はじめに

極楽世界に往生するためには、いかなることをすべきであろうか。これは浄土教学者や念仏行者が解答を求め続けた問である。昔から称名念仏のみで極楽往生ができるか否かを巡って長い間議論が続いてきた。もし称名念仏のみで極楽往生ができるとすれば、念仏を繰り返す録音機やロボットも極楽に行けるのではないかというふうにも考えられよう。ここでは、この疑問に対する解答を求めるために、新羅時代の元暁はこの問題をどのように理解していたのかを考察してみよう。

元暁は、『無量寿経宗要』と『阿弥陀経疏』でこの問題について触れている。彼によれば、極楽往生行には往生の直接的原因になる正因と、間接的原因になる助因がある。発菩提心が往生の正因であり、その他念仏の観法や諸功德行は助因であるという。すると、彼のいう菩提心とはいかなるものであるのか。論理の飛躍になるかも知れないが、彼の仏教思

想の流れにおいていつでも論議されることが一心如来藏思想である。この思想は、彼の浄土教学においても同様に説かれていた。彼は、一心如来藏と發菩提心とを同一視する。發菩提心の本体は他ならぬ一心であるというのである。この点については既に他の論文¹で扱ったことがあるので、本稿では主に『無量寿経宗要』と『阿弥陀経疏』における元曉の發菩提心往生正因説について考察する。

2. 『無量寿経宗要』の發菩提心往生正因説

元曉は『無量寿経宗要』の科文を①大意門、②宗致門、③分別門、④解釈門の四つに分けている。そして、二つ目の宗致門を浄土果と浄土因に分類する。さらに、浄土因を成弁因と往生因に分けており、また往生因を経論説と略弁其生相に分けて詳細に説いている。本論文はこのうち元曉の往生因を中心に論議を進めていきたい。元曉が引用している様々な經典上の内容を紹介してみると、主に『観経』の十六観と『往生論』の五念門とが中心になっている。これについては『無量寿経』の三輩因で具体的に説いている。まず、『無量寿経』の上輩をみると、次のようである。

今依此經 說三輩因 上輩之因 說有五句 一者捨家棄欲而作沙門 此顯發起正因方便 二者發菩提心是明正因
三者專念彼佛是明修觀 四者作諸功德是明起行 此觀及行為助滿業 五者願生彼國 此一是願前四是行 行願和合
乃得生故²

すなわち、『無量寿経』の三輩因の中で上輩因は、第一、沙門になることと、第二、發菩提心することとが往生の直接的な正因になり、第三、念仏することは観を修行することであり、第四、功德を積むことは行を起すことである。これは往生の間接的な助滿業になる。第五、極楽國に往生することを發願することは願を立てることになる。前の四つの正因、そして助因の往生行と願生發願とが一緒になって、極楽國への往生が得られる」としている。ここで元曉は

発菩提心が往生行の正因であることを明確に示している。

このようなことは中輩においても同様である。

中輩之中 説有四句 一者雖不能作沙門 当発無上菩提之心 是明正因 二者專念彼佛 三者多少修善 此觀及行
為助滿業 四者願生彼国 前行此願 和合為因³

すなわち、「出家沙門にはなれなかつたとしても、発菩提心することは往生行の正因であり、念仏と功德行は助滿業になり、願生彼国は発願である。往生行と発願が合つて往生の因になる」としている。ここでも同様に発菩提心を往生行の正因として説いているのである。ところが、下輩では、不定性人と菩薩種性人に分けて論じており、まず不定性人とは次のようである。

下輩之内 説二種人 二人之中 各有三句 初人三者 一者假使不能作諸功德当発無上菩提之心 是明正因 二者
乃至十念 專念彼佛 是助滿業 三者願生彼国此願前行 和合為因 是明不定性人也⁴

すなわち、「下輩の中で不定性人は功德は積めなかつたとしても、発菩提心さえすれば、これが往生の正因になる。そして、乃至十念の念仏行は助滿業であり、願生彼国の発願があるべきである。こうして、往生行と発願が合つて往生ができるようになる」としている。ここでも発菩提心を往生行の正因として説いていることがわかる。

次は菩薩種性人についてみてみよう。

第二人中 有三句者 一者聞甚深法 歡喜信樂 此句兼願發心正因但為異前人舉其深信耳 二者乃至一念念於彼佛
是助滿業 為願前人無深信故 必須十念此人深信故 未必具足十念 三者以至誠心 願生彼国 此願前行和合為

人此就菩薩種性人也⁵

すなわち、「第一、菩薩種性人が阿弥陀佛と極樂莊嚴の法門を聞き、深い信心と歡喜心を發することは、すでに發菩提心を兼ねていることなので、往生行の正因になる。しかし、先ほど述べた不定性人の深信とは異なる。第二、菩薩種性人は一念だけを念仏しても助滿業になる。これは不定性人は深信をもっていないので、必ず十念をすべきであるが、菩薩種性人は深信を持っていてるので、十念をせず一念念仏だけでも助因になることができるからである。第三、菩薩種性人は至誠心をもって願生彼国の發願を立てる。従って、發心の正因と念仏の助因である往生行、そして願生の發願が和合されている人を菩薩種性人と言え」としている。

ここでは菩薩種性人と不定性人との相違点を明らかにしている。菩薩種性人は深信と至誠心、そして欲生我國の三心すべてをとり揃えている人なので、一念念仏のみでも下輩往生ができるが、不定性人は三心が足りないので必ず十念念仏を具足すべきであると説いている。従って、『無量壽經』の乃至十念と『觀無量壽經』の具足十念との相違点が明らかになっている。すなわち、菩薩種性人は一念乃至十念をもって往生することができるが、不定性人は具足十念をしなければいけないとしている。従って、『無量壽經』の乃至十念は菩薩種性人とは不定性人のために説いていることであり、『觀無量壽經』の具足十念は不定性人のために説いていると見なすべきであろう。

このように、元曉は經論に見られる往生行について言及した後、自分の見解を明している。すなわち、略弁其生相をもって往生行の正因と助因について論じている。ところが、本論文の主題が「元曉の發菩提心正因説」であるので、ここでは往生行の正因説のみに焦点をあわせて考察しよう。彼は正因の總標を説明し、これを隨事發心と順理發心とに分けて説明している。まず、總標をみると、次のようである。

此文略弁其生相 於中有二 先明正因 後顯助因 經所言正因 為菩提心言發無上菩提心者 不顧世間富樂 及

與二乘涅槃 一向志願三身菩提 是名無上菩提之心總標雖然⁶

すなわち、「往生相の文章を簡略に分別してみると、まず、正因、そして助因とに分けられる。経では正因を菩提心としている。発無上菩提心とは、世の富や楽しみ、二乗の涅槃を顧みず、ひたすら三身菩提を得るように願うことを言う。総体的にはこのようである。無上菩提心を起こし、三身菩提を成就しようとするのが浄土往生の正因であるとしている。しかし、三身菩提については詳細な言及はない。次に、無上菩提心について随事発心と順理発心の二つによって説いている。

まず、随事発心についてみると、次のようである。

於中有二 一者随事発心 二者順理発心 言随事者 煩惱無数願悉断之 善法無量願悉修之 衆生無邊願悉度之 於此三事 決定期願 初是如来断德正因此是如来智德正因 第三心者 恩德正因 三徳合為無上菩提之果 即是三心總為無上菩提之因 因果雖異 広長量齊 等無所遺 無不苞故 如経言 発心畢竟二無別如是二心 如是二心前心難 自未得度先得他 是故我礼初発心 此心果報 雖是菩提而其華報 在於浄土 所以然者 菩提心量 広大無邊 長遠無限故能感得広大無際依報浄土 長遠無量正報寿命 除菩提心 無能当彼 故説此心為彼正因 是明随事発心相也⁷

すなわち、「二つの中で、一つ目は随事発心であり、二つ目は順理発心である。随事発心とは、無数の煩惱すべてを断つよう願い、無量の善法すべてを修めるよう願い、無辺の衆生すべてを济度するよう願うことである。これは次の三つにおける決定的な願である。一つは如来の断徳正因であり、二つは如来の智徳正因であり、三つは恩徳正因である。三徳が合って無上菩提果になる。すなわち、このような三心はすべて無上菩提の因になる。たとえ、因と果が異なっても、

廣くて長い量においてはすべてが同じであり、等しきにおいては捨てるものがなく、すべてを含まないことがない。『涅槃經』で説かれているように「発心は畢竟においても二つが異ならず、このように二つの心の中で前の心が難しいのである。自分を済度する前に他人を済度するので、この縁故で私が初発心に礼を表す」としているが、この心は果報である。たとえ、菩提と言ってもそれは華報として浄土にある。従って、菩提心の量は廣大無辺であり、長さや遠さが無限であるので、能く廣大無際な依報浄土と長遠無量な正報寿命を感得するのである。菩提心を除くと、それに対応するものがないので、この心を浄土往生の正因とし、随事発心の模様を明らかにするのである。」

これを整理してみると、随事発心とは、煩惱を断つ断心・善法を修める修心・衆生を済度する度心という三心の願力として、如来の断徳と智徳、そして恩徳という三徳の正因になって、無上菩提因になる。また、三徳が合って無上菩提果が得られる。これらは四弘誓願の中で、佛道無上誓願成を除いた衆生無辺誓願度、煩惱無尽誓願断、法門無量誓願学の三つを言うのである。従って、随事発心者は四弘誓願の中で、三つの願を発願することを意味していると見るべきであろう。また、無上菩提の因と果が異なるというものの、空間的な量や時間的な差はすべてが等しく、時空を超越し普く含めている。これを証明するために、『涅槃經』の偈頌を引用して初発心を強調している。同時に初発心は浄土往生の因としてのみ存在するのではなく、浄土往生の果報として極楽世界の依報莊嚴と阿弥陀佛の正報莊嚴をすでに感得しているのである。従って、菩提心を起こした時には、すでに往生の果報までも内包しているので、往生の正因と言うべきである。これを随事発心の模様であると明確に整理している。言い換えれば、元曉は随事発心とは四弘誓願のうち三つの願であり、これを起こした時、すでに極楽往生の果報を成就したことになるので、往生の正因であると説いている。

次は順理発心について見てみよう。

所言順理而発心者 信解諸法皆如幻夢 非有非無離言断慮 依此信解発広大心 雖不見有煩惱善法 而不撥無可断可修 是故雖願悉断悉修 而不違於無願三昧 雖願皆度無量有情 而不存能度所度 故能順隨於空無相 如経言如是滅度無量衆生 実無衆生得滅度者 乃至広説故 如是発心 不可思議是明順理発心相也。

「すなわち、順理発心とは、諸法すべてが幻のようであり、夢のようであり、ありもないし、なしもなく、言葉が断ち、思いが離れていることを信じまた理解することである。このような信解に頼り広く大きな心を発する。たとえ、煩惱と善法があるのを見ることができないといえども、煩惱を断ち善法を修めたことがないので、治めることができない。従って、すべてを断ち、すべてを修めることを願っても、無願三昧に反しない。たとえ、すべての無量な有情を滅度しようと願っても、滅度させる者と滅度される者がいるのではない。従って、空と無相とに従うのである。『金剛経』で、このように無量衆生を滅度させるが、実は衆生が滅度されたことはないなどと広説するようである。従ってこのように発心するのは不可思議である。これをもって順理発心の模様を明らかにするのである。」

順理発心とは佛の無相、無我の法を信解し発心することをいう。たとえ、煩惱を断ち、善法を修めることができないとしても、そうすることを願うとこれは願があっても、無願三昧と言える。これは先ほど述べた四弘誓願のなかで煩惱無尽誓願断と法門無量誓願学を言うのである。そして、衆生を滅度させようと発願しても、滅度させるといふ相がなければ、空三昧と無相三昧であると言える。これは、他ならぬ衆生無辺誓願度を言うのである。言い換えれば、順理発心とは、四弘誓願を発願するが、相のないまま発願することを指す。元暁はこのように説きながら般若思想の代表的な経典である『金剛経』を引用している。

最後に随事発心と順理発心についてまとめているが、その内容は次のようである。

随事発心 有可退義 不定性人 亦得能発 順理発心 即無退転 菩薩性人 及能得発 如是発心 功德無辺 設

使諸佛窮劫演説彼諸功德 猶不能尽 正因之相 略説如是¹¹

隨事發心とは、具体的な事象によって生じる發心をいう。これは緣事發心とも言うが、いつでも退く可能性のあるもので、不定性人も能く發心することができるのである。しかし、順理發心は佛の真理を信解し生じる發心を指す。これを緣理發心とも言うが、いつでも退くことができないものなので、菩薩性人が能く發心することである。二つの發心の功德は無量無辺し、諸佛もその功德を言葉ではすべてを言えないほどである。これをもって往生行の正因としての發菩提心の模様を簡略にまとめている。

以上で見てきたように、元曉は『無量壽經宗要』で發菩提心が往生行の正因であることを明らかにしている。彼は三輩の中で、上輩と中輩の場合には發菩提心が正因であると見ているが、一方、下輩では不定性人と菩薩種性人の往生行を区分している。そして、また下輩における二つの部類の發菩提心を二つの發心として説きながら、四弘誓願を發願することが他ならぬ發菩提心であることを明らかにしている。不定性人の發心は隨事發心であり、また有退轉發心であるが、菩薩種性人の發心は無退轉發心であるといい、これはすべての無量な功德を持つ往生行の正因であることを明確に説いている。

3. 『阿彌陀經疏』の發菩提心往生正因説

また、元曉は『阿彌陀經疏』でも往生行の正因として發菩提心を挙げている。そして『無量壽經宗要』と同様に念仏と諸功德行を助因として見ている。彼は『阿彌陀經疏』の第三解積門を一序分、二正説分、三流通分に分類し、さらに正説分を①二種清淨果、②二種勸修、③引例証成に分けている。この中で、二種勸修を勸發願と明修因であるとし、正因と助因として分類している。この内容は次のようである。

正因衆言不可以少善根福德因縁得生彼国者 顯示大菩提心攝多善根以為因縁乃得生故如菩薩地發心品文¹²

元曉は『阿弥陀經』の「舍利弗不可以少善根福德因縁得生彼国」の經文を注釈しながら、發菩提心往生正因について説いている。少善根福德因縁をもっては往生することができないが、大菩提心の多い善根を撰取する因縁を持っているので、往生することができるとしながら、『菩薩地發心品』の文章を強調している。しかし、『菩薩地發心品』の出所は未だに明らかになっていない。続いて、發菩提心は少善根ではなく、殊勝善根で往生ができると言っている。

又諸菩薩最初發心能撰一切菩提分法 殊勝善根為上首故 能違一切有情處所三業惡行功德相応案云 菩薩初發菩提之心 能撰一切殊勝善根 能斷惡業功德相応 是故説言非少善根福德因縁得生彼国 所以得知此為因者¹⁴

すなわち、「またすべての菩薩は最初に發心する時、一切の菩提分法を撰取しているので、發菩提心ということこそ殊勝した善根の中でも最高である。従って、一切有情世界の三業で作られた惡業とは異なり、すべての功德に相応する。」さらに、「案云」と言っているが、これが元曉の考え出した案であるのか、若しくは他の人が話した言葉であるかということについては明らかでないが、本研究者は元曉の考えであると思っている。「考えてみると、菩薩の初發菩提心は一切の殊勝した善根をすべて撰取しているので、能く惡業を切り、功德と相応する。従って、發菩提心をする時、『阿弥陀經』で説いているように少善根福德因縁をもって往生することではない。このような正因をもって得られるということを知べきである。」すなわち、彼は少善根福德をもっては往生ができないが、菩薩の發菩提心は殊勝善根福德をすべて撰取しているので、往生の正因であると言っている。

続いて、『無量壽經』の三輩を引用し、發菩提心正因説と發菩提心善根説を説明している。

兩卷中撰九品因以為三輩 三中皆有發菩提心 論中唯顯此文意 言大乘善根界等無譏嫌名 此意正言生彼国者 雖

有九品齋因大乘発心善根 所以等無譏嫌之名也 有人難言 若要発大心方生浄土者 不応生彼而証小果 彼無退具 故 若乃退大而証小果無有是処故¹⁵

すなわち、『無量寿経』の三輩九品では発菩提心が説かれている。『往生論』でもこのような意味が現れているが、「大乘善根界にはすべて等であるといつても嫌がる名前がない」としている。¹⁶この言葉の意味は正しい。たとえ、九品が分けられているとしても大乘発心善根が因になるので、譏嫌の名はないのである。これは極楽世界には三悪道のような嫌らしい存在は名前さえないことに由来する。従って、発心をする、嫌らしい名前すらも聞いたり見たりすることができない。ということ、発心者は決して三悪道の世界には行かないのである。

しかし、ある人は難しいと言うが、もし大心を発し浄土に生まれた者はその国で生まれたことにおいて小果を証得しては相応しない。彼には退具がないからである。もし大退は小果を証得することになるので、ここにいないのである。言い換えれば、少善根の小果では退転であるので、浄土に生まれることができないのである。

次は『無量寿経』の第18願文を引用しながら、発菩提心について説いている。

又兩卷中十八願中言 設我得佛 十方衆生至心信樂 欲生我國 乃至十念 若不生者 不取正覺 唯除五逆誹謗 正法 若未発大心不得生者 則応亦揀未発心 而不揀故明知不必然 不至心為至心言之所揀 故更不須揀 雖有是 破皆不応理 所以然者発菩提心既是正因 未発心者 直は無因 而非有障何須揀別 五逆謗法乃是障礙非直無因故 須揀別 是故此難無所聞也

又非生彼退菩提心 断在此間先発大心熏成種子 後是退心下地現行良由先発大心種子不失 故得作因以生彼國取 小果耳 是故彼難還顯自短之耳¹⁷

すなわち、「また、『無量寿経』の第18願文を引用し、五逆罪と正法誹謗者との往生不可について論じている。発心のできない者は往生することができないということは、当然未発心を区別することであり、不揀を明して知ろうとすることであるので、必ずそうする必要はない。不至心とは至心を話すために区別するのである。再び区別することは正しいことではないが、たとえ破する場合があるといえども、すべて理致に相応するのではない。このように発菩提心はすでに正因であり、未発心者はつまり無因である。障碍があることではないのに、はたして揀別することができるのであろうか。五逆罪や正法誹謗者及び障碍者はつまり無因ではないので、揀別を待つのである。ということ、これについては難しく聞いたことが無い。」このような元暁の見解は、五逆罪者や正法を誹謗した者、また根欠者などの障害者であるといっても、発菩提心をすれば、往生することができるが、18願から除外されていない者であっても発菩提心をしなければ往生の無因となり極楽に生まれることができないということになる。従って、彼は往生行の条件として何よりも発菩提心を重視していることがわかる。

「また、菩提心から退くと、その国に生まれることができない。但し、その間に先に菩提心を発し、種子を熏習してから心が退くと地位以下に現れる。まず、大心を発し種子を失わなかったので、極楽に往生する因になり、現在大乘菩提心から退いても小果でその国に生まれることができる。従って、彼が帰ってくることは難しくなるので、自ら短さを表す。」すなわち、菩提心を発しなく小果では往生することが難しいが、菩提心を発してから退転心を出したら、彼はすでに出したので往生することができるのである。

これまで、元暁の『阿弥陀経疏』における発菩提心往生正因説を考察してみた。彼は『阿弥陀経』の少善根福德では往生ができないが、発菩提心を出すと多善根を撰取する因縁で往生することができるという。すなわち、発菩提心そのものが他ならぬ殊勝善根なので、往生の正因になるのである。また、『無量寿経』18願の五逆罪人と正法誹謗者及び根欠者も発菩提心のみを発すると往生ができ、もし小果を成し遂げた者であっても、先に菩提心を発してから退いても往生がで

きるのである。

4. 終わりに

これまで見てきたように、元暁は発菩提心往生正因説と念仏往生助因説を主張している。彼は、発菩提心は一心如来藏であり、信心であるので、これをもって往生することができるとしている。発心の正因と念仏の助因である往生行と願生彼国の願力とが合って往生するとしながら、あくまでも発心がなければできないと説いている。このような根拠は浄土三部経において、詳細に論じられている。『無量寿経』においては三輩往生すべてに発菩提心が前提になっており、『観無量寿経』においては三福往生に発菩提心を正因としており、三輩九品においては部分的に強調している。ところが、『阿弥陀経』においては阿弥陀佛の護念による阿耨多羅三藐三菩提を得るといいながら、後では釈迦牟尼佛の菩提心証得について説いている。

元暁の『無量寿経宗要』では三輩往生の正因説と下輩往生者の随事発心と順理発心が説かれている。とくに前者を不定性人の発心としており、後者を菩薩種性人の発心であると説明している。また、『阿弥陀経疏』においては少善根福德者の往生はできないと対していることに對し、発菩提心さえすれば、往生ができると主張しているのである。

注

- 1 拙稿「浄土学の一心思想」、『元暁学研究』第6輯（慶州芬皇寺元暁学研究院、二〇〇一）、八五―一〇六頁。
拙稿「元暁浄土教における往生の問題」、『元暁学研究』第7輯（慶州芬皇寺元暁学研究院、二〇〇二）、二三五―五六頁。
- 2 元暁選『無量寿経宗要』（大正蔵三七、一二八b）
- 3 同上
- 4 同上

- 5 同上
- 6 同上 (一二八c)
- 7 同上
- 8 經典の出所は『大般涅槃經』卷38 迦葉菩薩品の偈頌部分 (大正蔵二一、五九〇a) である。
憐愍世間大医王 身及智慧俱寂静 無我法中有真我 是故敬礼無上尊
発心畢竟二不別 如是二心先心難 自未得度先度也 是故我礼初発心
初発已為人天師 勝出声聞及緣覺 如是発心過三界 是故得名最無上
- 9 『無量壽經宗要』 (大正蔵三七、一二八c)
- 10 鳩摩羅什訳『金剛般若波羅蜜經』 (大正蔵八、七五一a)
当生如是心 我応滅度一切衆生 滅度一切衆生已而無有一衆生実滅度者
- 11 前掲書
- 12 元曉述『阿弥陀經疏』 (大正蔵三七、三五〇a)
- 13 『阿弥陀經』 (大正蔵二二、三四七b)
- 14 前掲書
- 15 同上
- 16 『往生論』 (大正蔵二六、二三一a) 「大乘善根界 等無譏嫌名」
- 17 同上
- 18 『無量壽經』 (大正蔵二二、二六八a)